

[平成31年度版]

推進期間：平成29年度～平成31年度

学力向上推進プロジェクト

授業改善6つの方策

～日々の授業の充実を通して～

学力向上の取組の重点を「授業改善」におき、日々の授業の充実を通して、本県幼児児童生徒に「確かな学力」を身に付けさせ、「生きる力」を育みます。



授業改善6つの方策

- めざす授業像の共有
- 教材研究の充実
- 学力向上マネジメントの推進
- 学習を支える力の育成
- 集団づくり・自主性を高める取組の充実
- 教育行政による効果的な支援体制の構築



平成31年3月
沖縄県教育委員会

目 次

本県における学力向上の取組	2
ー本プロジェクト策定にあたってー	
平成30年度全国学力学習状況調査結果から	3
I 学力向上推進プロジェクトの基本的な考え方	4
II 取組の重点	6
～ 本県学力向上の取組の重点を「授業改善」におく ～	
III 授業改善6つの方策	
方策1 めざす授業像の共有	8
方策2 教材研究の充実	9
方策3 学力向上マネジメントの推進〈共有・浸透〉	10
方策4 学習を支える力の育成	10
方策5 集団づくり・自主性を高める取組の充実	11
方策6 教育行政による効果的な支援体制の構築	11
学力向上推進プロジェクト「授業改善6つの方策」構造図	12
IV 本プロジェクト推進に向けた各機関における体制づくり	13
V 参考データ	14
VI 参考資料	15
日々の授業の充実を通して	17

本県における学力向上の取組 ―本プロジェクト策定にあたって―

○子供たちが直面する未来

21世紀に入り、グローバル化やICTの進化等により、コミュニケーションの方法が多様化し、ライフスタイル及び社会全体が目に見える形で急速に変化してきています。また、少子高齢化に見られるような社会構造的な要素も複合し、今後も予測困難な社会変化に直面していくことが考えられます。

本県においても、2030年を想定した『沖縄21世紀ビジョン』が策定され、「世界に開かれた交流と共生の島」など、めざすべき将来像を示すとともに、「国際交流に向けた基盤整備」など、インフラの整備やグローバル化等への対応も克服すべき課題として取り上げています。

このような急激な社会変化に直面するであろう子供たちが、望ましい未来を切り拓き、社会の中で十分に自己実現できるようにしていくためにも、本県の教育、とりわけ学力向上の在り方について改めて考えなくてはなりません。

○本プロジェクトにおける3年間の役割

こうした激変する社会の中で、これからの時代に求められる資質・能力を明確にし、それらを育成するための授業の在り方を模索していく必要があります。

文部科学省は次期学習指導要領に向けて、学習内容に加え、「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく授業改善を提唱するなど、学習方法についても言及しています。

本県としても新たな時代へ対応する視点をもった授業改善を推進していく必要があると考え、3年間で「授業改善」を大きく前進させるための期間と位置付けるとともに、「授業改善」の取組を支える「6つの方策」を示し、県全体で方向性を一つにした学力向上の取組を推進します。

○県全体が一体となった取組へ

昭和63年度に沖縄県の学力向上対策が施行されてから、平成29年度で30年目を迎えます。その取組の成果は、学校における教師の授業力の向上につながり、全国学力・学習状況調査においても小学校が全国水準に達し、中学校が全国水準との差を縮小しているなど目に見える形で表れています。ことに本県の学力向上の取組における成果の要因として、県全体が統一感を持ち、ベクトルを揃え、取組を推進したことが大きかったと考えています。

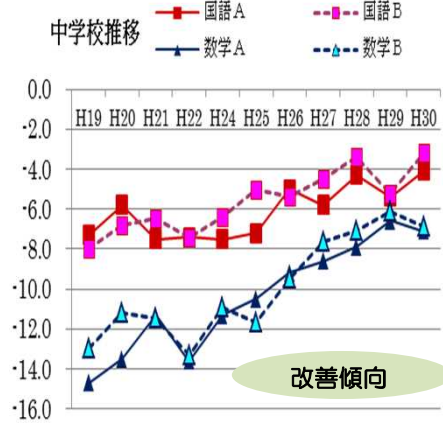
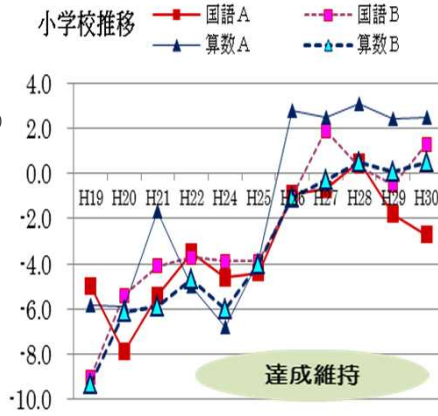
今後も本プロジェクトで示した方向性をもとに、学校・家庭・地域・行政機関等が一体となった具体的な取組を推進し、本県の子供たちが、自らの人生を主体的に切り拓いていくことができるよう「確かな学力」の向上をめざします。

平成30年度全国学力・学習状況調査結果から

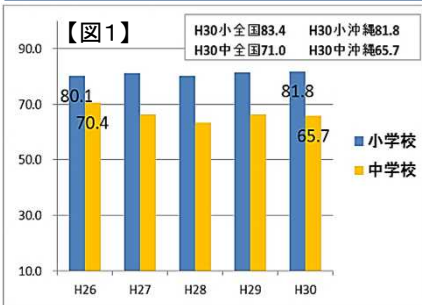
— 学力については向上傾向にあるものの、「授業の質的改善」「組織的取組」については課題が見られる—

本県児童生徒の学力(全国平均値差)

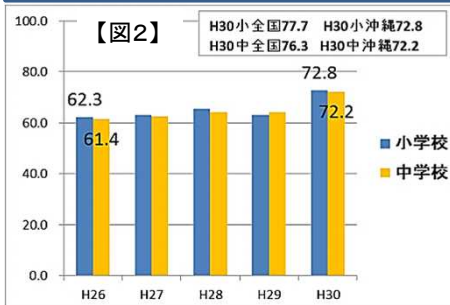
小学校：国A (-2.7) 国B (+1.3)
算A (+2.5) 算B (+0.5) 理 (+0.7)
※30%未満 (-1.5) 無答率 (-0.9)
中学校：国A (-4.1) 国B (-3.2)
数A (-7.1) 数B(-6.9) 理 (-5.1)
※30%未満 (+4.8) 無答率 (+0.5)



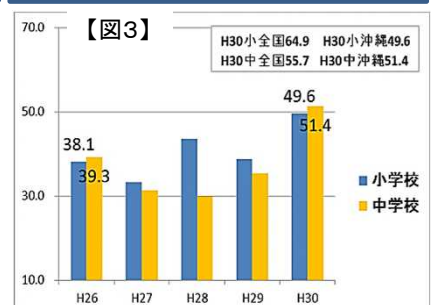
【児童生徒質問紙】算数・数学の授業の内容はよく分かりますか？「当てはまる」「どちらかという当てはまる」の回答合計



【児童生徒質問紙】話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたり、できていると思いますか？「そう思う」「どちらかというと思う」の回答合計



【学校質問紙】一人一人のよい点や可能性を見つけ評価する(褒めるなど)取組をどの程度行いましたか？「よく行った」と回答

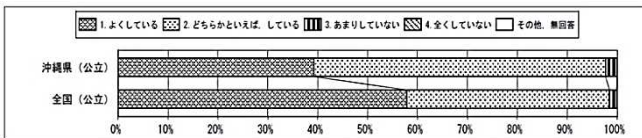


考察

【図1】授業改善に関わる項目として「算数・数学の授業の内容がよく分かるか」についての経年推移をみると、小学校においてはほぼ横ばい傾向、中学校においてはやや下降傾向にある。また、小中共全国より低く推移している。
【図2】「話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりできているか」についてはH26から小中とも10ポイント増加したが、全国より低い数値にある。
【図3】「よい点・可能性を見つけて評価する取組」の傾向は、H26から小中とも10ポイント以上増加したが、全国値より中学校は5.4ポイント、小学校は15.3ポイント下回っている。小学校で全国値との差が大きい。

図4 【学校質問紙】児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか。

【小学校】



【中学校】

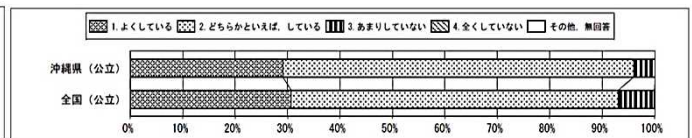
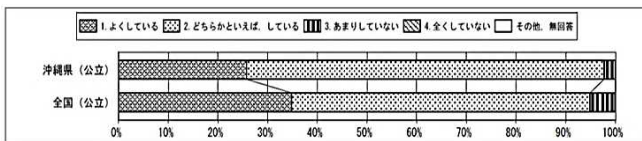
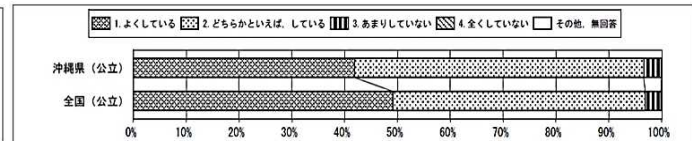


図5 【学校質問紙】学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいますか。

【小学校】



【中学校】



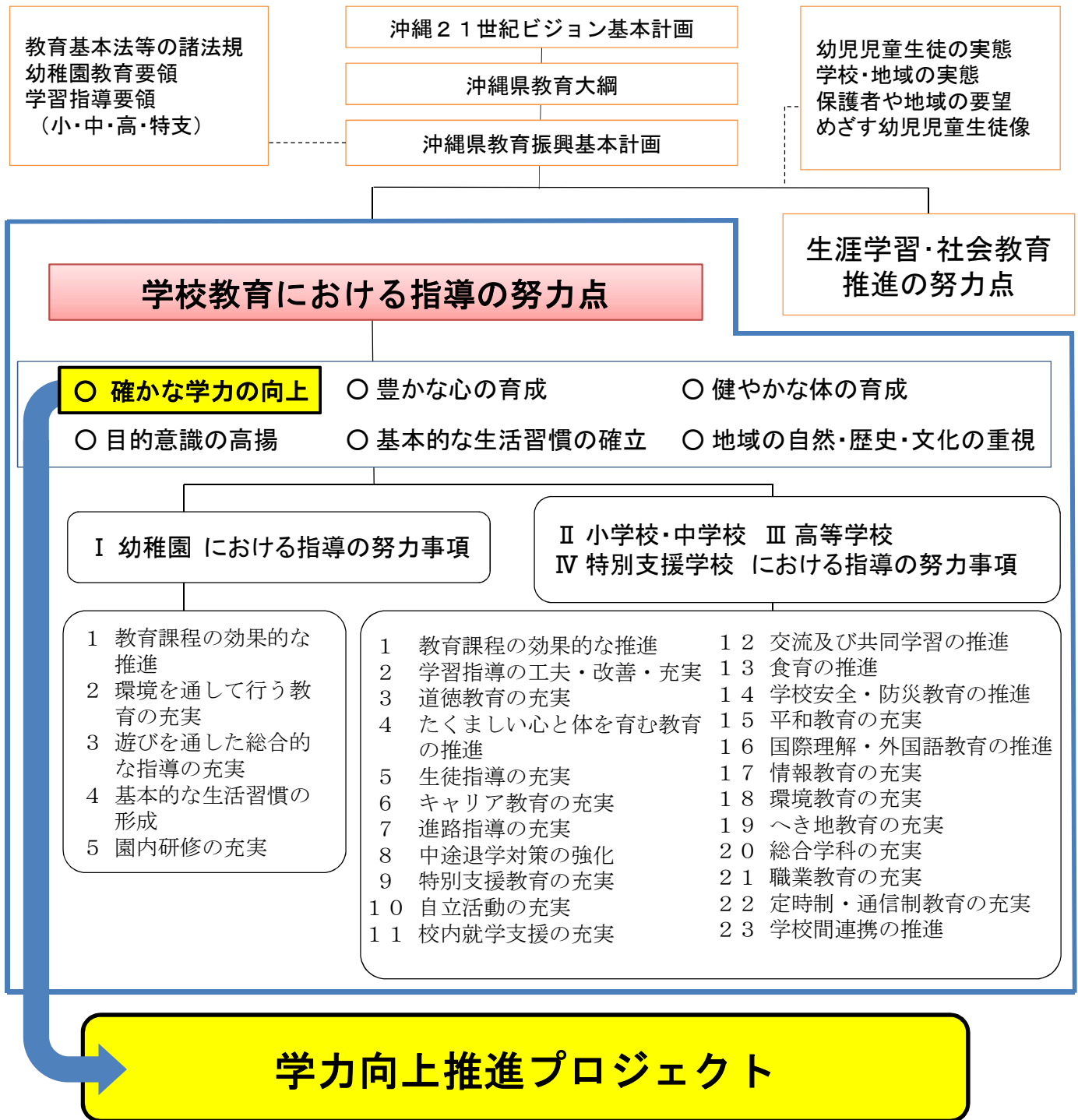
考察

【図4】「PDCAサイクルの確立」や【図5】「学校の組織的取組」について、「よくしている」と回答した数値は全国値よりも低い傾向にある。全国との比較において、PDCAの確立や学校の組織的取組について課題がみられる。より意識的な取組を推進したい。

I 学力向上推進プロジェクトの基本的な考え方

1 本プロジェクトの位置付け — 「確かな学力」の向上を具現化する—

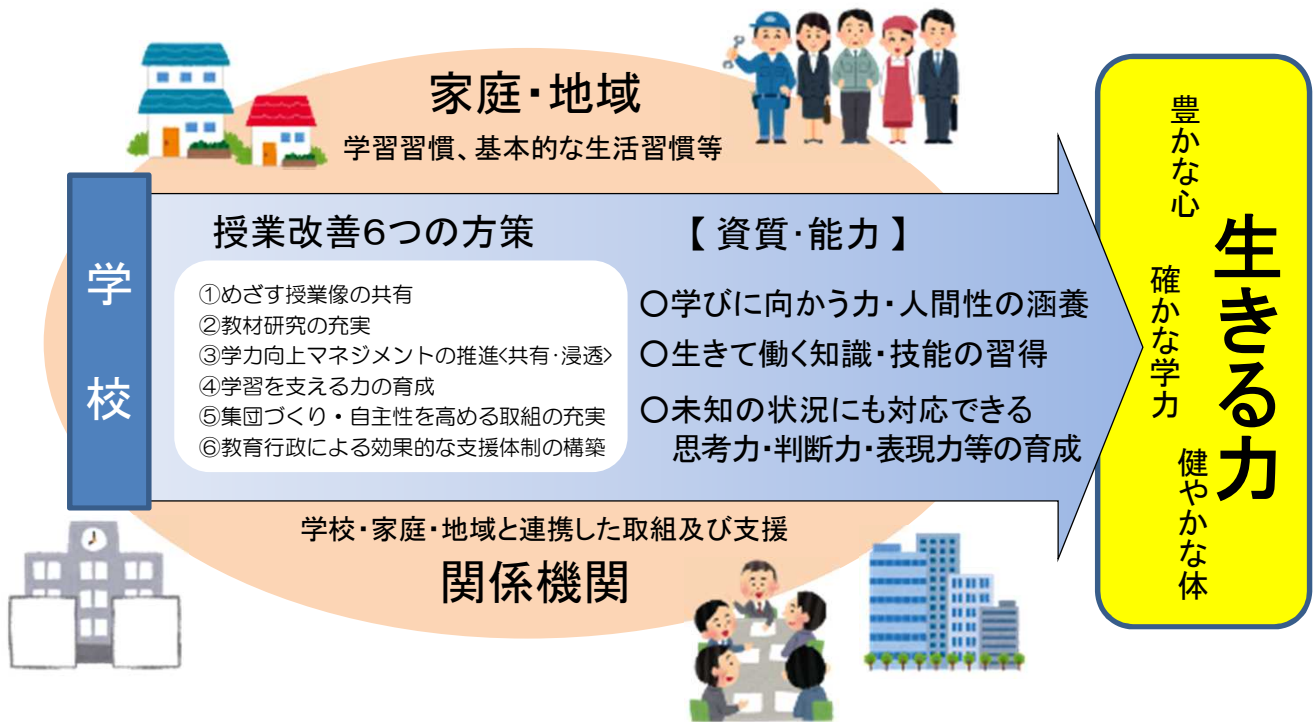
本プロジェクトは、教育関連法規や学習指導要領及び本県の各教育施策をベースに作成されており、特に「学校教育における指導の努力点」として掲げている「確かな学力」の向上を踏まえ、実効性のある取組をめざして、その方向性や内容を示したものである。



2 基本構想 ー学校・家庭・地域・行政機関等が一体となった取組を推進するー

本県の全ての子供に、確かな学力などの「生きる力」を育むためには、家庭や地域社会における生活を基盤に、基本的な生活習慣等を形成するとともに、学校における授業等でこれからの時代に求められる資質・能力を身に付けさせる必要がある。

以上のことから、学校・家庭・地域・行政機関が連携し一体となり、子供一人一人に寄り添った取組を推進することで、「生きる力」を育む。



3 推進期間 … 平成29年度 ～ 平成31年度

4 総括目標 … 本県児童生徒の学力を全国水準に高め、維持する。

5 成果指標 … 全国学力・学習状況調査を指標とし検証する。

児童生徒の学力状況の判断は全国学力・学習状況調査を指標とし、特に以下の結果をもとに総合的に判断する。

- 小学校全科目において全国平均正答率以上の維持、及び中学校全科目において全国水準まで向上
- 平均正答率30%未満の児童生徒の割合及び無解答率の減少
- 児童生徒質問紙における学習意欲等に関連する項目の数値の向上
- 学校質問紙の「授業における基本事項」等に関連する事項の数値の向上

Ⅱ 取組の重点

～ 本県学力向上の取組の重点を「授業改善」におく ～

全国学力・学習状況調査における学校質問紙の結果からは、「めあての提示」等、本県における学校の積極的な授業改善の取組状況がわかる。一方、「思考を深める発問」等の課題も見えており、さらなる授業改善が必要である。

また、新学習指導要領の実施を円滑に進めていくためには、子供たちにこれから必要とされる資質・能力の育成の視点を盛り込んだ「授業改善」に取り組んでいくことも必要である。

こうした背景からも、本プロジェクトの推進期間における学力の向上取組の重点を「授業改善」におき、幼・小・中・高・特支が連携し、系統的・継続的な授業改善の推進を支える方策を明確にし、県全体で一体感をもって推進することで、子供たちに確かな学力を育むことができると考える。

今後3年間の推進期間においては、以下の2点を基に授業改善を推進し、学力向上を図る。

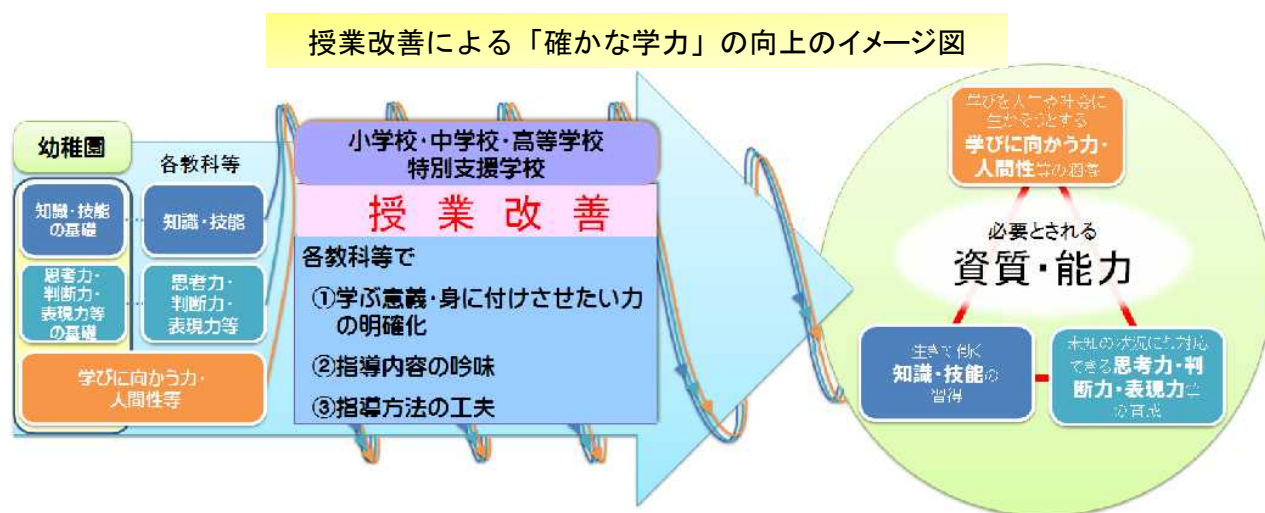
1 幼・小・中・高・特支が連携し、系統的・継続的な授業改善を推進する

〈授業改善の方向を示す3つのポイント〉

- ・各教科等で学ぶ意義・身に付けさせたい力の明確化（何ができるようになるのか）
- ・各教科等の指導内容の吟味（何を学ぶのか）
- ・各教科等の指導方法の工夫（どのように学ぶのか）

〈各学校の取組〉

- ・子供たちに必要とされる「資質・能力の3つの柱」で整理した評価計画へ
- ・「カリキュラム・マネジメント」を生かした指導計画へ
- ・「主体的・対話的で深い学び」を実現する（アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた）授業へ



2 「授業改善6つの方策」を県全体で共通実践する

方策1：めざす授業像の共有

方策4：学習を支える力の育成

方策2：教材研究の充実

方策5：集団づくり・自主性を高める取組の充実

方策3：学力向上マネジメントの推進

方策6：教育行政による効果的な支援体制の構築

Ⅲ 授業改善6つの方策

幼児児童生徒の「確かな学力」の向上を図るため、県教育委員会、市町村教育委員会、学校が連携し、授業改善6つの方策をもとに取組を進める。

方策1 めざす授業像の共有

めざす授業像を共有し、授業改善の取組を展開する

方策2 教材研究の充実

多様な教材研究の方法を共有することで、授業改善の推進力を高める

方策3 学力向上マネジメントの推進〈共有・浸透〉

マネジメントを機能させ、全校体制で取組を推進する

方策4 学習を支える力の育成

学習を支える力を育成することで、子供たちの学習意欲を高め授業改善を下支えする

方策5 集団づくり・自主性を高める取組の充実

支持的風土づくりや生徒指導のポイントを生かした授業改善を推進する

方策6 教育行政による効果的な支援体制の構築

教育行政の学校支援体制を充実させ、学校と共に授業改善を推進する

方策1

めざす授業像の共有

- めざす授業像を共有し、
授業改善の取組を展開する -

これから必要とされる資質・能力を育成するために、めざす授業像を共有し、めざす子供の姿が実現できるよう学びを支援する授業を展開する。

めざす授業像

他者と関わりながら、課題の解決に向かい「問い」が生まれる授業

めざす子供の姿

- 主体的に「問い」をもち、自分なりの考えをもつ
- 他者との交流を通し、「問い」が生まれ自分の考えを広げ深める
- 学びの過程を振り返り、新たな「問い」をもつ

〈 子供の学習活動例 〉

- ・課題から「問い」を発見する。
- ・めざすゴールをイメージする。
- ・課題の解決に向けた見通しをもつ。
- ・既習の知識・技能を活用して課題に取り組む。
- ・比較、分類、類推するなど多角的・多面的に考える。
- ・他者との交流を通して、自分の考えを吟味する。
- ・学びの過程を振り返り、新たな「問い」を見いだす。
- ・自己評価を通して、自分の変容を確認する。

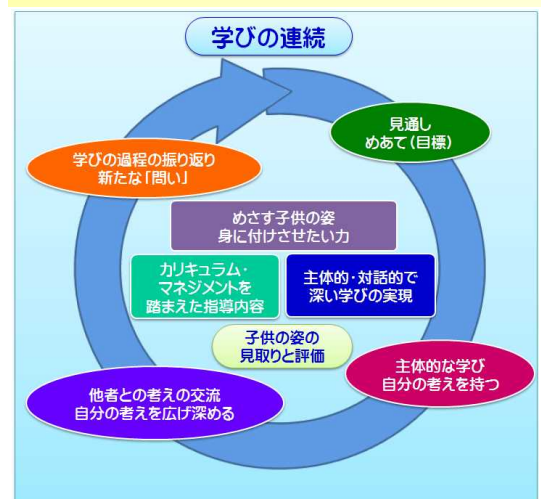


〈 教師の支援例 〉

- ・子供の「問い」を引き出す課題の提示
- ・子供の「問い」を生かした「めあて(目標)」の設定
- ・見通しをもち、めざすゴール(評価規準)をイメージさせる工夫
- ・自分で課題に向き合い考える時間の設定
- ・既習の知識・技能を活用する場面の設定
- ・比較、分類、類推など深い学びにつなげる発問の工夫
- ・他者との交流を通して、自分の考えを吟味するなど、深い学びにつなげる場面の設定
- ・多様な意見や考えを整理・分類し、まとめさせる工夫
- ・「めあて」と正対した「まとめ・振り返り」の確実な実施
- ・学びの過程を振り返り、新たな「問い」をもたせる工夫
- ・定着状況の的確な把握と必要に応じた手立ての工夫
- ・子供の姿の見取り(評価)を生かした授業展開(指導)
- ・学習規律、支持的風土の確立



めざす授業像のイメージ図



方策2

教材研究の充実

－ 多様な教材研究の方法を共有することで、
授業改善の推進力を高める －

授業改善を計画的・継続的に推進していくとともに、「学び続ける教師」として実践を積み上げ授業力を高めていくためには、教師一人一人がカリキュラム・マネジメントを意識し、多様な教材研究の方法を職員間で共有し、組織的に教材研究を進めていくことが重要である。

1 「教材研究ツール」の活用

授業改善を進める上で、子供の実態把握や授業の振り返りを含めた教材研究を重ねることが重要である。下記のような「教材研究ツール」を日常的に活用することで、授業力が高まる。

〈 教材研究ツール例 〉

- 教材研究ノート
 - 板書型指導案
 - 授業プランシート
 - 授業振り返り3点ツール（板書計画・授業板書・児童生徒ノート）
- ☞ 参照（P14～15）

2 各種資料の分析・活用

教材研究を充実させるためには、学力調査等の結果分析を行うとともに、授業づくりに係る資料等の活用を通して、授業改善につなげることが大切である。

〈 学力調査等の結果分析 〉

- 全国学力・学習状況調査
- 県学力到達度調査
- 学力向上Web調査
- 学校・学級の実態調査 等

〈 各種資料の活用 〉

- 学校教育における指導の努力点
- 「問い」が生まれる授業サポートガイド
- わかる授業 Support Guide
- 学習指導要領及び解説
- 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料
- 全国学力・学習状況調査 報告書・授業アイデア例 等

3 組織的な取組の充実

授業改善に取り組むためには、教師一人一人がカリキュラム・マネジメントを意識した授業を実践し、さらに、教師一人一人の日々の授業実践を組織体制で支える必要がある。

(1) 学年会・教科会の充実

授業改善を効果的に推進するためには、学年会や教科会を教材研究を深める場とすることが大切である。学年会や教科会を十分に機能させ、教材研究の充実を図る。

(2) 授業研究会の充実

授業研究会では、めざす授業や子供の姿の実現を図れたかどうかについて協議し、具体的な授業改善につなげていくことや、教科や学年、校種間の枠を越えた共通の視点をもって協議することが重要である。

(3) 校種間の連携

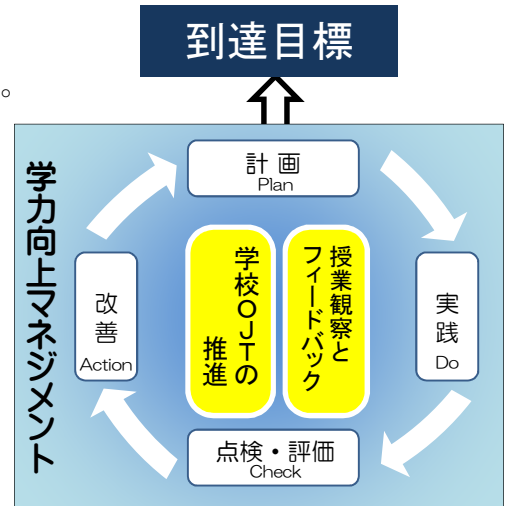
めざす授業や子供の姿の実現を図るためには、系統的・継続的な取組を進める必要があり、そのためには、幼・小・中・高・特支が学びの連続性・系統的な指導を意識し連携することが大切である。

方策3 学力向上マネジメントの推進〈共有・浸透〉 - マネジメントを機能させ、全校体制で取組を推進する -

全ての教職員が学力向上の具体的な到達目標を共有し、取組を徹底、連動していくことで、実践意欲を高め、学校全体で授業改善を推進し、児童生徒の学力の向上を図る。

1 学力向上マネジメントを機能させる

- (1) ビジョンの構築・共有・浸透
めざす子供の姿、めざす授業像を共有し、浸透させる。
- (2) 到達目標の設定及び具体的な手だての明確化
具体的な到達目標を設定し、到達目標に向けた具体的な手だてや道筋（学力向上年間サイクル）を講じ、その意義を全職員で共有する。
- (3) PDCAサイクルの円滑な推進
取組の進捗状況を定期的に点検し、課題については新たな改善策を講じるPDCAサイクルを円滑に推進し、学力向上の取組をマネジメントする。



2 全校体制による取組を推進する

- (1) 管理職による日々の授業観察とフィードバック
管理職は日々の授業及び教育活動を観察し、個々の実践について適宜フィードバックを行い、授業改善を推進する。
- (2) 学校OJTの推進
学年会、教科会、校内研究等の充実により、同僚性を構築し職員相互が学び合い、成長を促す職場風土を醸成する。

方策4 学習を支える力の育成 - 学習を支える力を育成することで、子供たちの学習意欲を高め授業改善を下支えする -

授業改善を推進していく上で、その土台となる「学習を支える力」を育成していくことは重要である。特に以下の点については、学校・家庭・地域が連携し積極的に取り組んでいく。

規範意識・マナーの向上

学校生活や家庭生活を通して、挨拶、返事等の習慣化、他人を思いやる心や認め合う心等を育む。

学習環境の充実

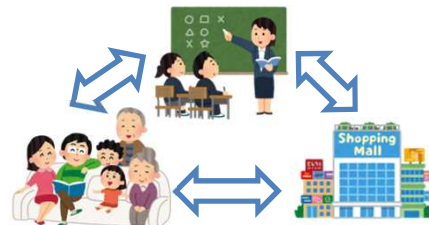
学習規律を整え、互いを尊重する言語環境と学びの空間が整えられた教室環境を充実させる。

読書活動の充実

図書館等の活用を推進し、主体的・目的的な読みの力を培うとともに、読書をする習慣を身に付け、豊かな心を育む。

家庭学習の習慣化

家庭では、家庭学習を習慣化させるとともに、学校では「授業と連動した宿題」及び「自主学習」を推進する。



部活動の充実と適正化

部活動への加入促進と活動時間等の適正化を図り、学習意欲の向上や責任感・連帯感を涵養する。

生活リズムの確立

毎朝きちんと朝食をとり、「食べて、動いて、よく寝よう」を実践し、規則正しい生活リズムを確立する。

対話の充実

家庭を中心とした対話を通して、心の居場所をつくり、絆を深め、自尊感情を高めて、夢や希望を育む。

体験活動の充実

体験活動を通して、生活や学習に対する興味・関心・意欲を高め、問題発見・問題解決能力を育成し、社会性を育む。

方策5

集団づくり・自主性を高める取組の充実

－ 支持的風土づくりや生徒指導のポイントを生かした授業改善を推進する －

互いに高め合える集団づくりを通して、個人・集団における自主的・実践的な態度を育成することは、「他者と関わりながら、課題の解決に向かい『問い』が生まれる授業」の土台となる要素である。集団づくり・自主性を高める取組の充実をめざし、以下の3点を推進する。

○ 支持的風土をつくる学級経営

教師と児童生徒の信頼関係や児童生徒相互の温かい人間関係を築き、子供同士が自分の考えや思い等を安心して表現できる支持的風土は、主体的・対話的な学びの基盤となる。支持的風土を醸成できるよう学級経営の充実を図る。



○ 生徒指導の三つのポイントを生かした授業

よりよい集団づくりや自主性を高めるためには、他者と関わることの良さを実感し自分なりの考えをもって行動できることが重要である。そのためには、「生徒指導の三つのポイント」（①自己存在感を与えること。②共感的な人間関係を育てること。③自己決定の場や機会を与えること。）が生かされた授業を日常的に実践する必要がある。



○ 学びに向かう集団づくりを進める学級活動及び児童会・生徒会活動

児童生徒の自主的・実践的な態度を育てることは、個々の児童生徒や集団における問題解決能力の高まりにつながる。学びに向かう集団づくりを進めるために、学級活動や児童会・生徒会活動等の充実を図る取組は重要である。

方策6

教育行政による効果的な支援体制の構築

－ 教育行政の学校支援体制を充実させ、学校と共に授業改善を推進する －

学校における授業改善の取組の充実を図るためには、教育行政による効果的な学校支援体制を構築する必要がある。教育行政を担う各機関はそれぞれの施策の浸透を図るとともに、学校現場を第一に考える直接的な学校支援を重視する。

1 学校支援訪問等の充実

県教育庁（義務教育課・各教育事務所）、県立総合教育センター、市町村教育委員会は連携体制を構築し、学校支援訪問等を通して、学校における学力向上の取組を計画的、継続的に支援する。

〈 主な支援内容 〉

- 授業改善
- 学力向上マネジメント
- 集団づくり・自主性を高める取組

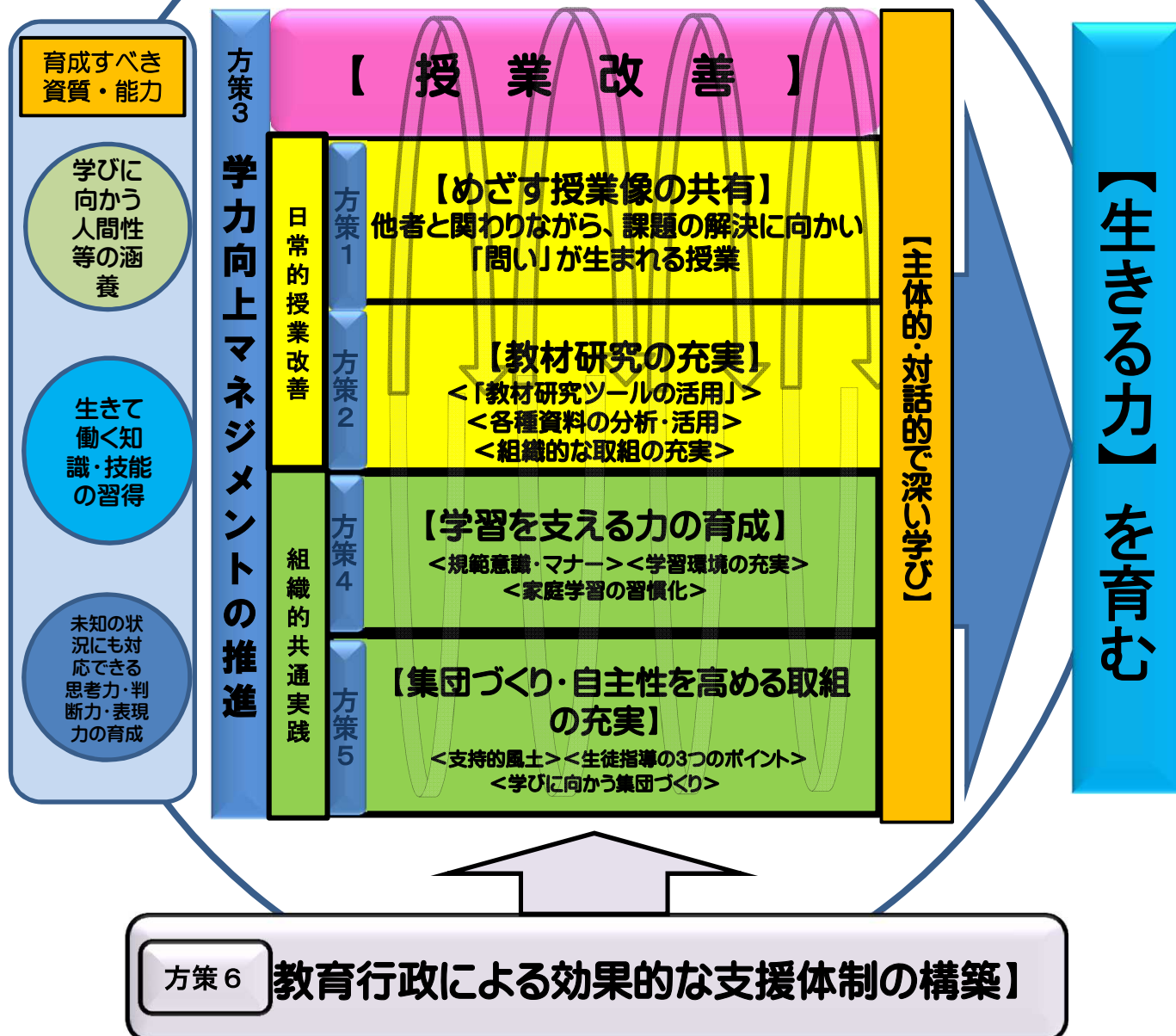


2 学力向上推進本部会議による提言

県教育庁関係各課、各教育事務所、県立総合教育センターで構成されている学力向上推進本部会議は、学力向上に係る取組の改善・充実を図るために、県全体で取り組むことが効果的だと考えられる事項について提言していく。

学力向上推進プロジェクト 「授業改善6つの方策」構造図

社会に開かれた教育課程



IV 本プロジェクト推進に向けた各機関における体制づくり

本プロジェクトの実施にあたっては、各学校、家庭・地域、教育行政がそれぞれの特性を生かして、以下のような組織体制づくりや事業を積極的に推進する。

1 各学校

(1) 幼稚園

- 生きる力の基礎を育むことをめざす創意ある教育課程の編成・実施
- 幼児一人一人の実態を把握し、発達に必要な経験が得られる指導計画の作成
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を具体的にイメージした教育・保育の工夫改善

(2) 小・中学校

- 生きる力を育み、創意工夫を生かした教育課程の編成・実施
- 研修成果の共有化と波及させることができる研修システムの構築
- 主体的な研究や研修への参画による教師の授業力の向上

(3) 高等学校

- 生きる力を育み、創意工夫を生かした特色ある教育活動の展開
- 言語活動の位置付けや言語活動を通して身に付けさせたい能力や態度（目標・ねらい）の明確化を図り、共通実践につなげる各教科の年間指導計画等の作成

(4) 特別支援学校

- 障害の状態、発達の段階及び特性等を考慮し、生きる力を育み、創意工夫を生かした特色ある教育課程の編成
- 個々の幼児児童生徒の障害の状態及び発達段階、特性等を的確に把握し、教師間の連携協力のもとに指導目標や学習内容を設定した個別の指導計画の充実

2 家庭・地域

- 「家（や）～なれ～運動」の推進による基本的な生活習慣の確立
 - ・「早寝・早起き・朝ごはん」の徹底
 - ・家庭における読書活動の推進
 - ・家庭学習の習慣化の推進
 - ・あいさつや家庭内ルールづくり
 - ・体験活動の充実 など
- 地域ボランティア等による学校の教育活動の支援
- 地域活動の活性化（子ども会・地域行事への参加など）



3 教育行政

(1) 県教育庁

- 各種研修会等の実施
- 学校支援訪問・授業改善推進教師の活用・ブロック型研究会の実施
- 健康の保持増進と体力の向上の推進
- 「家（や）～なれ～運動」（親のまなびあいプログラム等）の推進

(2) 県立総合教育センター

- 調査研究事業充実
- 「出前講座」等、学校教育支援（カリキュラム支援センターの機能）の充実
- 教職員の長期・短期研修の充実、法定研修及び経年研修の充実

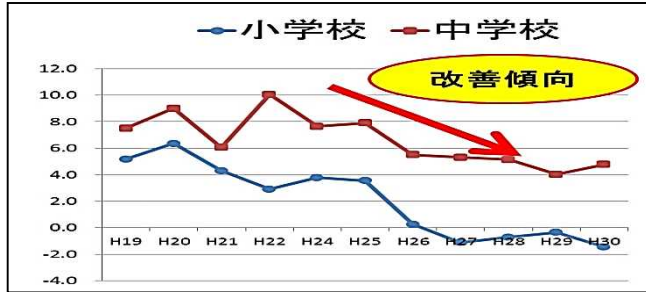
(3) 各市町村教育委員会

- 授業改善に係る学校支援訪問・各種研修会等の実施
- 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた支援

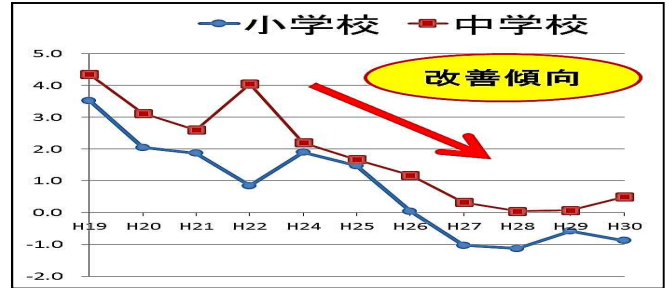
V 参考データ

◎全国学力・学習状況調査 平成19年から平成30年までの推移

「本県と全国の正答率30%未満の差」

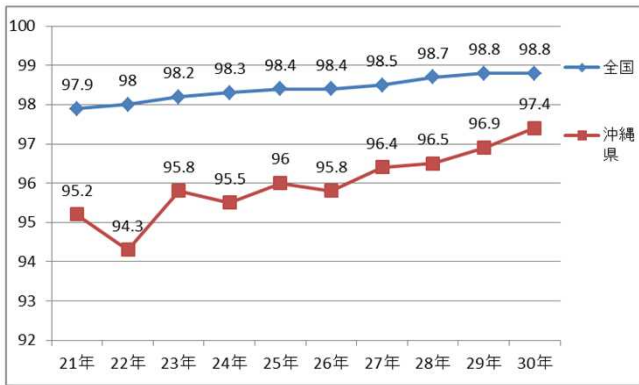


「本県と全国の無解答率の差」



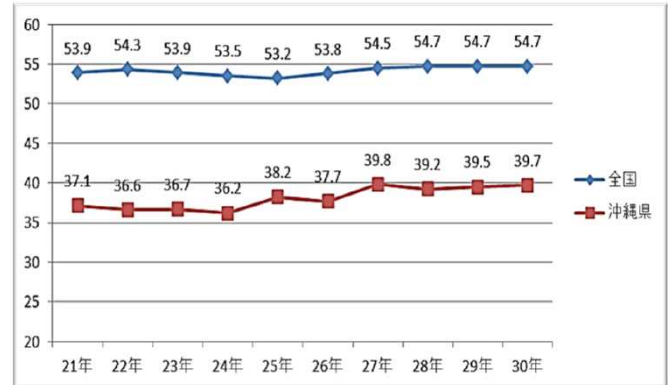
◎高校進学率

全国と沖縄県の平成20～平成30年度までの推移 (%)



◎大学等進学率

全国と沖縄県の平成20～平成30年度までの推移 (%)



話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか

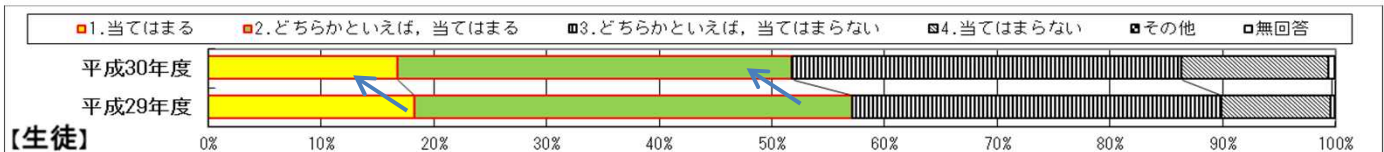


【生徒】

自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか



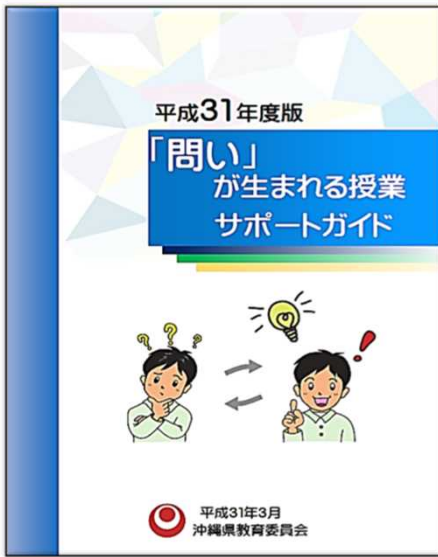
【児童】



【生徒】

「自分の考えを深めたり広げた」とする話し合い活動に関するポイントは上昇している。
一方、「自分の考えを工夫して発表した」とする発表に関するポイントは下降している。

VI 参考資料



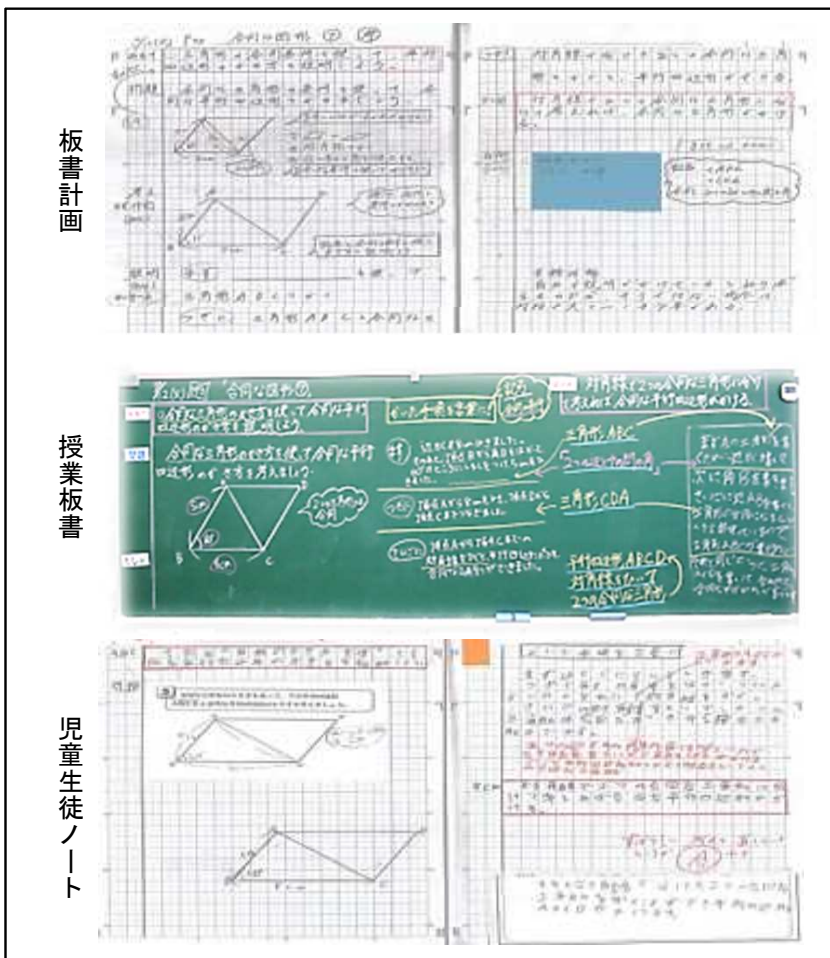
【「問い」が生まれる授業サポートガイド】

平成31年度版 授業における基本事項		教務教員
支持的風土・学習環境		
<ul style="list-style-type: none"> □ 互いに認め合い、支え合う風土の醸成 □ 学習環境(学習環境、言語環境、社会環境)の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 「確かな学力」の向上には、先導的・主体的な学習態度の醸成が不可欠である。 成長段階に応じた適切な学習環境の提供が求められる。 	
授業マネジメント		
タイムマネジメント		
<ul style="list-style-type: none"> □ 授業開始・終了時刻の徹底 □ 簡潔な説明と的確な指示 	<ul style="list-style-type: none"> 授業・活動・指導の進め方に、児童生徒の学習意欲を高める工夫が求められる。 授業時間内に学習の進捗を把握し、必要に応じて調整を行う。 	
めあて・まどか・振り返り【HS1重点項目】		
<ul style="list-style-type: none"> □ 身に付けさせたい力を踏まえた「めあて」の設定・提示 □ 「めあて」に基調した「まどか」「振り返り」の確実な実施 	<ul style="list-style-type: none"> 身に付けさせたい力を踏まえて、「めあて」を設定し、その達成に向けた学習活動を展開させる。 「めあて」に基調した「まどか」「振り返り」の確実な実施が求められる。 	
発問		
<ul style="list-style-type: none"> □ 学習のねらいに迫る集団的・計画的な発問 □ 思考を促し、深める発問の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> 一斉・個別な発問の両方を用い、学習のねらいに迫る集団的・計画的な発問が求められる。 思考を促し、深める発問の工夫が求められる。 	
思案・判断・表現		
<ul style="list-style-type: none"> □ 課題について自分自身の考えをもつ時間の確保 □ 学習のねらいの達成に向けた交流場面の設定 	<ul style="list-style-type: none"> 多くの考えをもつ上で発問と思考を促し、深める工夫が求められる。 学習のねらいの達成に向けた交流場面を設定する。 	
評価		
<ul style="list-style-type: none"> □ 授業の展開に基く評価(児童生徒の学習状況の見取り) □ 評価標準に基づく評価場面の設定と確実な評価の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 評価標準を基に設定し、適切な評価場面を設定し、確実な評価の実施が求められる。 	
授業・ノート・授業		
<ul style="list-style-type: none"> □ 思考を整理し考えを深める構造的な板書・ノート指導 □ 教具 ICT 活用等の効果的な活用 	<ul style="list-style-type: none"> 思考を整理し考えを深める構造的な板書・ノート指導が求められる。 教具 ICT 活用等の効果的な活用が求められる。 	

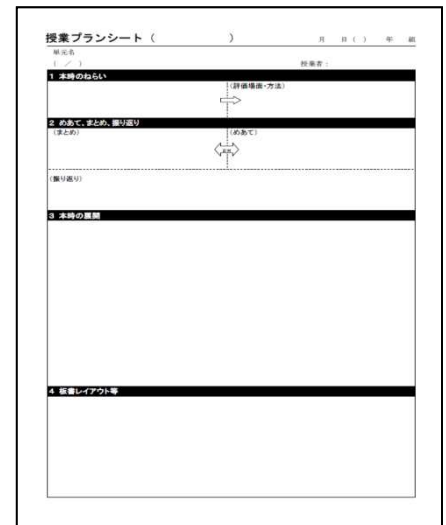
【授業における基本事項】



【指導の努力点(リーフレット版)】



【授業振り返り3点ツール】



【授業プランシート】



【「家なれ」運動継続】

【教材研究ノート】

小学校・国語科の例

中学校・国語科の例

小学校・社会科の例

小学校・算数科の例

【板書型指導案】

中学校・国語科の例

中学校・国語科の例

小学校・算数科の例

小学校・算数科の例

日々の授業の充実を通して

ある日、ある学校の授業の様子から……

～自治意識の育ち～

始業のチャイムが鳴る前、係の生徒がみんなに声をかけ入室を促している。学習委員は宿題の点検を済ませ、自分の席に向かう。教師はすでに教室に入り学習環境を点検している。生徒会組織と学級組織が連動しているこの学校においては、生徒会で決めた「始業2分前の入室と授業の準備」が徹底されている。「教科書が用意されていない人がいるよ」の級長の言葉に生徒達は速やかに机を整える。心地よい緊張感に自然と背筋が伸びる。

授業開始の号令がかかり、始業チャイムが流れ出す。日々、学びに向かう集団が育っていく。

～校内研究の成果が日常の授業に反映～

教材に対する興味関心を教師の問いかけが高める。生徒の言葉をもとに「めあて」が設定され、提示される。

生徒達は、教師の主発問に対して「う～ん」と唸りながらも懸命に考えている。導き出した自分の考えをノートに言語化する。指示された時間内にすらすらと文章にする。観点や条件を確認しながら自分の言葉を紡ぎ出す。校内研究の実践テーマである「書く活動の充実」が日常の授業に生きている。

～対話を通し学ぶ～

書いたことをもとに生徒はペアやグループでの対話活動を行う。根拠を示し自分の考えを伝える。他者の考えを聴き、取り入れながら、自分の考えを広げる。活動が深い学びにつながっていく。対話活動の間、教師は生徒のノートを確認したり、生徒の発言を広げたり、板書したりといった支援はするが、多くは語らない。教師の指示や説明で生徒の思考が途切れないように心掛けていることが伝わってくる。



～生徒指導の三つの機能が活かされた授業により生徒の自己肯定感が高まる～

この学級では、安心して自分の思いや考えを伝えることができる。支持的な風土が醸成されている。生徒指導の三つの機能が活かされた授業が日々展開されているからだ。そのため生徒の自己肯定感が高い。主体性が育ち、教師の手を離れても節度を欠くことがない。教師にはタイムマネジメントを意識するゆとりが生まれる。

授業終了10分前。教師は生徒の言葉を拾いながら丁寧に「まとめ」を行う。自分の思いや考えを話し、学級全体で承認されたことで、生徒の自己肯定感、有用感が高まっている。生徒の表情からそれがわかる。

～「揃える」ことの効果性～

残り3分で「振り返り」を書いている。生徒達から新たな疑問がこぼれ出す。教師はそのつぶやきを拾い、「今日の授業を振り返って新たに生まれてきた疑問について、あなたなりの考えを書いてきて下さい」と宿題を課す。「まとめ」、「振り返り」、「授業と連動した宿題」が全ての授業で意識されており、しかもその方法が多彩だ。これは「幼小中連携」における「授業の徹底事項」の一つだという。

～嬉しい上司の言葉～

終了を知らせるチャイムとともに授業が終わった。その日、授業観察を行っていた校長は授業者に「発問がこんなに生徒達の思考を深めるものなのかと驚いたよ。生徒達が主体的に学ぶ姿も素晴らしかった」と賞賛のコメントを伝えた。生徒同様に教師の自己肯定感も高まった。



授業には課題もあった。発問が少し抽象的であったため、生徒の思考が拡散しすぎた。しかし、教師の生徒に対する思いや授業改善に対する熱意は十分に伝わってきた。何より生徒達の目が輝いていた。生徒間の「学力差」を感じさせない授業でもあった。

さらに、校内研究、幼小中連携、生徒会活動、授業と宿題の連動等の「揃える」取組がこの授業を支えていた。学校全体の組織的な取組が個々の教師の力を十二分に発揮させ、向上させているのである。こうした個々の教師の努力による「日々の授業の充実」が生徒達の確かな学力を育み「生きる力」へとつながっていく。本プロジェクトは、こうした教師の日々の努力を支える指針となるよう願い作成した。各学校においては、本プロジェクトの趣旨を御理解の上、日々の「授業改善」に生かして頂きたい。

沖縄県教育委員会（下記アドレス）からダウンロードして御活用下さい。

学力向上推進プロジェクト

発行日	平成31年3月
発行	沖縄県教育委員会
	〔義務教育課学力向上推進室〕
	〒900-8571 沖縄県那覇市泉崎1丁目2番2号
	TEL 098-866-2741 FAX 098-866-2750
WEBサイト	http://www.pref.okinawa.jp/edu/index.html
	(沖縄県教育委員会)
